

平成10年度

教育研究員研究報告書

へき地教育

東京都教育委員会

平成10年度
教育研究員名簿

市町村名	学 校 名	氏 名
青 梅	青梅市立第一小学校	○南 枝 弘 之
青 梅	青梅市立霞台小学校	神 尾 健 彦
奥多摩	奥多摩町立氷川小学校	鈴 木 基
三宅島	三宅村立三宅小学校	中 村 泰 之
青 梅	青梅市立第二中学校	鈴 木 達 己
あきる野	あきる野市立五日市中学校	榎 戸 千代子
檜 原	檜原村立檜原中学校	星 野 靖
奥多摩	奥多摩町立小河内中学校	◎真 野 洋 二
新 島	新島村立式根島中学校	朴 元 綱
御 蔵 島	御蔵島村立御蔵島中学校	森 栄 治

◎全体世話人

○副世話人

担 当

東京都多摩教育事務所西多摩支所 指導主事 對 馬 伸一郎

同 上

山 本 修 司

目 次

I 研究主題設定の理由	1
II 研究のねらい	2
III 研究の仮説	2
IV 研究の全体構想	3
V 研究の内容	
<検証事例1 小学校第5学年 特色ある教育活動「三宅島から学ぼう」	4
「交流学习を軸に、地域の海や森での体験活動・地域で活躍する人々から学ぶ	
活動を通して、郷土に生きる誇りをもち、学ぶ力・表現力を高める指導の工夫」	
<検証事例2 中学校第1学年 社会「身近な地域」	8
「地域を題材にし、調査、発表の学習を通して、	
自ら学ぶ意欲を高め、表現力を豊かにする指導の工夫」	
<検証事例3 中学校第1学年 社会「近畿地方」	12
「パソコンやインターネットを使って日本の諸地域について調べることを	
通してその地域への興味・関心を高め、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫」	
<検証事例4 中学校第2学年 国語「いろはガルトの創作」	16
「地域素材を生かしたいろはガルトづくりを通して、	
郷土愛を育て、表現力を高める指導の工夫」	
<検証事例5 中学校全学年 その他の活動「地域学習」	20
「地域学習を通して、自分で考え判断し、主体的に	
問題解決していく態度・能力を育てる指導の工夫」	
VI 研究の成果と課題	24

研究主題 体験的な活動を生かし、児童・生徒 の生きる力を育む指導の工夫

I 研究主題設定の理由

1 生きる力について

これからの学校は、生きる力を育成するという観点を重視し「自ら学ぶ、自ら考える資質や能力」を培い、「他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、美しいものや自然に感動する心、郷土や国を愛する心」をはぐくむことを目指していくことが求められている。

一方、へき地の特性としては、住民の間に相互扶助の伝統があり、人と人とのつながりが密接である。また、伝統文化が継承され、豊かな自然環境に恵まれており、豊富な地域素材が身近にある。その反面、過疎化・少子化・情報化の進展によって、地域社会が変容しつつある。そのため、遊び相手の減少やテレビゲーム等の遊びの変化により、子どもたちが自然

に触れる機会が少なくなっている。

そうした中で、へき地校の子どもたちの実態として、素直・素朴・穏和であり、学級、異学年、地域の人たちとの密接な人間関係が保たれている、与えられた課題にはまじめに取り組む、その反面、競ったり高め合ったりする体験の不足から自主性に乏しく、自分の考えや気持ちを表現することが不得手である、などをあげることができる。

以上のことから、へき地教育部会では、生きる力を「自ら課題を見付け、進んで取り組もうとすること」「自分の考えをもち、進んで表現しようとするを通して、お互いを理解し、尊重しようとすること」「地域社会の一員としての自覚や郷土への誇りをもとうとする」との3点としてとらえ、授業実践を通じた研究活動を進めていくこととした。

2 生きる力の育成について

児童・生徒の発達段階から考えると、生きる力の育成には子どもたち自身がわくわくするような体験的活動を積み重ねていくことが重要である。生きる力が身に付く過程においては様々な課題が存在し、困難が立ちはだかるであろう。しかし、子どもたちにとってその課題そのもの、あるいは困難の向こうに見えるものが十分に魅力的なものであれば、目の前に横たわる諸課題に取り組む意欲がわき、課題解決のための工夫を自ら進んで行えると考えられる。このような活動を繰り返し体験する中から、自ら課題を見付け、進んで取り組もうとする態度・能力を育てることができると考えた。

また、自分自身の興味・関心に基づいた題材を選んで、調べたりまとめたりする体験的な活動から、自ら課題を見付け、進んで取り組もうとする態度が育つとともに、作品を発表し相互評価する活動を繰り返すことによって、自分の考えをもち、進んで表現しようとする態度や、お互いを理解し尊重しようとする態度が培われるであろう。さらに、地域取材しまとめる活動の中から、地域社会の一員としての自覚や郷土への誇りをもとうとする態度がはぐまれると考えた。

以上のことから、へき地教育部会では研究主題を、「体験的な活動を生かし、児童・生徒の生きる力を育む指導の工夫」と設定し、研究活動を進めていくこととした。

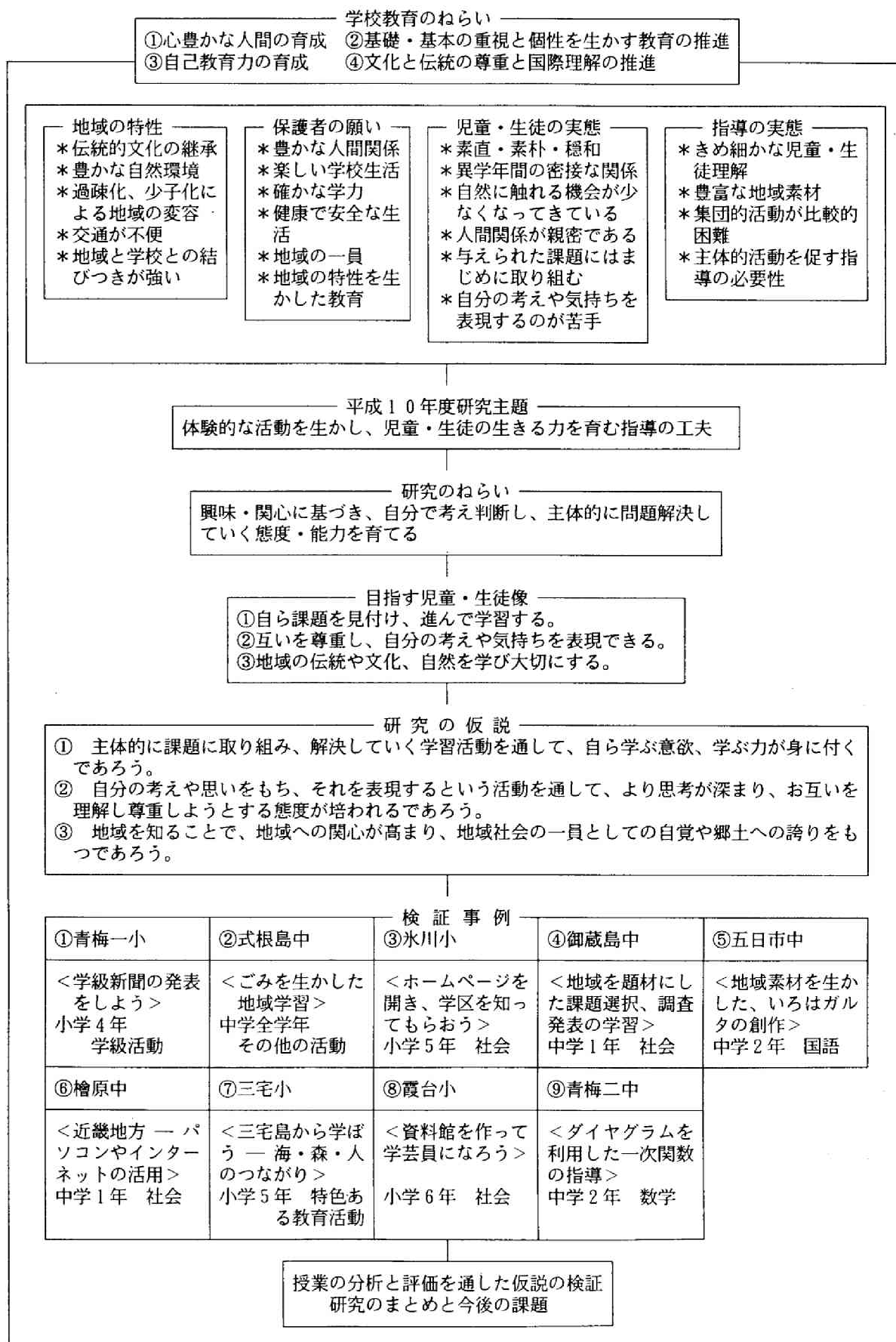
II 研究のねらい

興味・関心に基づき、自分で考え判断し、主体的に問題解決していく態度・能力を育てる。

III 研究の仮説

- 1 主体的に課題に取り組み、解決していく学習活動を通して、自ら学ぶ意欲、学ぶ力が身に付くであろう。
- 2 自分の考えや思いをもち、それを表現するという活動を通して、より思考が深まり、お互いを理解し尊重しようとする態度が培われるであろう。
- 3 地域を知ることで、地域への関心が高まり、地域社会の一員としての自覚や郷土への誇りをもつであろう。

IV 研究の全体構想



V 研究の内容

〈検証事例・その1〉

事例名 「交流学习を軸に、地域の海や森での体験活動・地域で活躍する人々から学ぶ活動を通して、郷土に生きる誇りをもち、学ぶ力・表現力を高める指導の工夫」

(小学校 第5学年 特色ある教育活動)

1 単元名とねらい

(1) 単元名 「三宅島から学ぼう－海・森・人のつながり」

(2) 単元のねらい

ア 自分たちが生きる島を、自らの課題に基づきより深く知るにより、進んで学習する意欲の向上を図る。

イ 自らの課題に基づいて学習したことを交流学习を通して分かち合うことにより、表現意欲を高めお互いを尊重しあう態度を育成する。

ウ 三宅島の豊かな自然について学ぶことにより、知ることに喜びを深め、自然界への尊敬の念をはぐくむ。自然と人間の関係を学び、人間の在り方について考え、地域の自然や文化を大切にす態度の育成を図る。

2 単元を通じた授業仮説

ア 地域の自然から学んだことを課題とし、体験学習で仲良くなった高遠北小学校の子どもたちと共通の課題を分かち合うことにより自ら学ぶ意欲・学ぶ力が身に付くのではないか。

イ 自分たちが興味・関心をもったことを基に、ビデオレター作成や大人と話し合うという活動を通して、お互いを尊重し自分の考えや気持ちを表現できるようになるのではないか。

ウ 生活に密着した題材（海・森）を扱い、その素晴らしさを知ることにより自然に対する尊敬の念をもつのではないか。また、地域の方々から話を聞き意見を交換することにより、地域で活躍する人々の思いや生きる姿勢を学ぶと同時に人とのつながりの大切さに気づき、地域に生きる誇りをもてるのではないか。

3 地域の様子

三宅島は東京の南南西約180キロに浮かぶ周囲約33キロメートルの火山の島である。人口は約3,900人。集落は阿古・坪田・伊豆・神着・伊ヶ谷の5地区に大きく分けられる。6・7月の降水量は多い。

四季を通じて人々は海や山に親しみ、児童も自然からの恵みを体験している。地域で活躍する人々並びに保護者は学校に対して協力的である。

神着のおしゃく神社の祭り、2年に1度の富賀神社大祭など地域の文化伝統が生きている。本校は伊豆地区にあり神着、伊ヶ谷、伊豆3地区の児童が通学している。児童数は107名。地域ごとに行事も多く、地域の目は子どもたちに温かい。

4 児童の実態

男子12名女子6名計18名のクラスである。素直な児童が多い。海や山に親しんでいるが、自然への興味・関心、生き物への憧憬などは十分だとは言いがたい。身近な植物で遊んだり野山に親しんだりしているため、より深く自然を感じる心・自然を見る目が育てば島の素晴

らしさに改めて気が付くと思うが、今は目の前の豊かな自然が当たり前存在するものとして認識している。

5 単元学習指導計画における仮説と検証の視点

時	指 導 計 画	各段階における仮説	検 証 の 視 点
1 3 4	高遠体験学習で信州の自然と文化を体験し、児童との交流を深め、高遠北小との交流学習を開始する。	交流学習を通して自己を表現し相手を尊重する態度が培われるであろう。	つながりを大切にし、自己を表現し伝えようとしたか。(体験学習並びにビデオレター交換において)
5 9月 中旬	「海のパログラム」モイヤー先生と長太郎池でサンゴを視点にした海中観察をする。(協力: ジャックTモイヤー氏)	普段見ているはずの場所が、視点を変えることにより、生き物たちの素晴らしさに気が付き興味・関心が深まるであろう。	サンゴや魚たちを興味深く観察し、その素晴らしさに気が付くことができたか。
6	長太郎池での体験を作文に書く。	体験を文章表現することにより、より思考が深まるであろう。	興味・共感・感動を適切な文章で表現できたか。
7	作文をもとに個人の課題を決める。	自分が得た感動から課題を決めていくことによって、進んで学習する意欲が高まるであろう。	作文の内容と課題に関連があるか。
8 9	課題について調べる。(本・ビデオ・新聞・テレビ・取材等を通じて)	サンゴを取り巻く環境などについて課題意識をもち考えが深まるであろう。	学習した内容を把握し、郷土への思いを深めることができたか。
10	ネイチャーガイド海野義明氏との話し合い。	海への思い・姿勢、サンゴに関することなどを話し合うことによって海への思いが深まるであろう。	話し合いで、自分の思いを表現することができたか。
11	ビデオレターの返事を見て、作成するビデオの内容を検討する。	友達の声にこたえる形でのビデオ作成のため意欲が高まるであろう。	相手の立場に立って内容を検討することができたか。
12 13	海とサンゴについてビデオレターを作成する。	自分の思いや考えを友だちに伝えようという試みを通して、表現したいという意欲が高まるであろう。	ビデオ制作をすることで思考が深まったか。
14 11月 初旬	「森のパログラム」森林の遷移が見られる場所(赤場峠付近)で観察を行う。(協力: アカコッコ館レンジャー 日高哲二氏)	森林の発生初期段階で特定の樹木が多いということに気付くことで、興味・関心が喚起され課題意識が芽生えるであろう。	オオバヤシャブシの特徴に気付き、パイオニア植物としての働きを理解し、森林の奥深さに気付くことができたか。
15 17	オオバヤシャブシを基点に森林の遷移をまとめる。	特定の植物の目から森林の遷移を見ることによって感情移入ができ、自ら学ぶ意欲が高まるであろう。	森の偉大さに気付き、植物の生命の営みに共感できたか。
18	ビデオレターの返事を見て、作成するビデオの内容を検討する。	友達の声にこたえる形でのビデオ作成のための意欲が高まるであろう。	相手の立場に立って内容を検討することができたか。
19 20	三宅の森についてのビデオレター作成。	オオバヤシャブシを中心にするこゝで伝えたいことが明確になり、同じ生命としての植物について深く考察できるであろう。	相手に伝わるように内容を精選し効果的に組み立てることができたか。
21	海と森から学んだことについて話し合う。	海や森の学習から学んだことを話し合うことによって、考えを深めることができるであろう。	自分の意見をしっかりとつことができたか。
22	話し合いを基に身近な海や森がどうあってほしいか、そのために自分ができることを話し合う。	自分たちが生きる島の価値を知り、主体的な行動をとる意欲が生まれるだろう。	意見交換をしたことによって確固たる意見をもち得たか。
23	学んだことを基に地域で活躍する人々と話し合う準備をする。	学んだことを表現しようとするこゝでより思考が深まるであろう。	自己を表現しようとする気持ちが生まれたか。
24 本 時	「海と森から学ぶ」地域の方々との話し合い(ジャック・モイヤー氏、海野義明氏、日高哲二氏、西野直樹氏、村上 康氏)	<ul style="list-style-type: none"> ●自ら学んだことを地域の方々とはち合うこゝで郷土への思いが高まるであろう。 ●話し合いを通して思考が深まるであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●主体的に話し合いに参加することができたか。 ●話し合うこゝによって考えが深まったか。

6 本時の学習指導

- (1) 題材 「海と森から学ぶ(話し合い活動)」
- (2) 本時のねらい
- 既習の学習からまとめたことを発表し、自分たちのテーマについて話し合うことで進んで学習する意欲の向上を図り、お互いを尊重する態度を育成する。
 - 助言者と意見交換をすることによって表現意欲を高める。
 - 話し合いの中で郷土の素晴らしさに気付く。
- (3) 本時の授業仮説
- 海や森での学習から設定した課題を解決した後、意見・考えをもちそれをもとに新たに設定したテーマを助言者と話し合うことによって、自己を表現しお互いの考えを尊重できるであろう。
 - 助言者と話し合うことによって論点が定まり表現への意欲が向上し考えが深まるであろう。
 - 郷土の素晴らしさに気付き、それを担おうとする気持ちが芽生えるであろう。
- (4) 展開

	学 習 活 動	教師・助言者の支援・指導 上の留意点	検 証 の 視 点 (方法)
導 入	主題を確認する。 今日のテーマについて 「海と森から学ぶ」 モイヤー先生から (スーパーバイザー)	助言者の紹介 ジャック・モイヤー氏・海野義明氏(ネイチャーガイド)・日高哲二氏(アカコッコ館レンジャー)・西野直樹氏(西野園芸経営者)・村上康氏(本校PTA会長)	
展 開	海と山についての学習を振り返り意見を発表する。 (児童) 1. 海から学んだグループからの提案 話し合い 2. 森から学んだグループからの提案 話し合い 3. 宇宙人グループからの提案 話し合い 4. 自由討議	<ul style="list-style-type: none"> ●助言者は子どもと対等に話し合うことに留意する。 ●意見や考えを分かち合うことに主眼を置く。共感的な態度で話を聞くことを心がけさせる。(児童) 	<p>既習した内容から根拠のある発言をしているか。 (観察)</p> <p>他者の意見を尊重しているか。 (観察) 伝わるように話しているか。 (観察)</p>
ま と め	助言者からの感想・スーパーバイザーからのまとめ		授業を振り返り学んだ内容について自分の思いをもつことができたか。

(5) 評価

ア 子どもたちは既習内容からまとめた自分の意見をしっかり発表し、助言者が子どもたちが決めたテーマに沿って意見を述べてくれたことで、相手の考えを尊重しようという態度が生まれ、助言者の意見の中から新たな課題をそれぞれが発見し学習への意欲が向上した。

イ 助言者が子どもたちの思いを大切にして発言してくれたので、子どもたちは話の内容をよく理解し自分の課題を解決しようと深く考えた。子どもたち自身が提案したテーマだったので、自分の意見を発表しようとする意欲が高まった。

ウ 助言者（郷土で活躍する人々）が郷土への思い・アドバイス等をテーマに沿ってわかりやすく話してくれたので郷土への理解が深まり愛着が増した。世界と三宅島の関係にまで話が及び、自然界のつながり・人間のつながり・世界のつながりの大切さまでを学ぶにいたった。

(6) 授業仮説に対する評価

身近な海や森での体験的な学習から課題を設定し、自ら調べ学んだことをもとにテーマを決めたので子どもたちは自信をもって発言することができた。助言者も子どもたちの思いを大切にしながら発言してくれたので、子どもたちは真剣に聞き入るとともに、自分たちの学習を認める助言者の発言に歓喜した。三宅島に生きる人々の思い、共に未来を考えていこうという姿勢、自然の中での遊び、おじいさんやおばあさんの知恵から学ぶなど、子どもたちは新たな学びに目を輝かせ、発言してよかったと思い、そして、郷土の素晴らしさとそこに生きる誇りを学んだ。

7 成果と課題

長太郎池海中観察ではジャック・モイヤー先生と海野義明氏、椎取り神社の森林観察ではアカコッコ館レンジャー日高哲二氏の協力を得た。三宅島の自然に精通している方々に案内していただきわかりやすく説明していただいたので学習意欲が高まり、子どもたちは自らの課題をもち、調べ考えることができた。

調べ方も、資料、テレビの活用、モイヤー先生や海野義明氏へのインタビューなど多岐にわたった。さらに、調べたことを高遠北小学校の子どもたちと分かち合うという交流学习を通して課題解決への意欲、表現への意欲も高まった。

この単元のまとめの授業である「海と森から学ぶ」では、子どもたちが既習内容から設定したテーマについて助言者（地域で活躍する大人たち）と話し合うことによって意見を交換することができ、お互いを尊重する態度が育成された。子どもたちは助言者の発言から新たな学びを得た。また、子どもたちの表現力は高く評価された。

課題として、本時が100分にわたる長時間であったためゲーム的な時間も組み込んだ方がよかったと思われること。ビデオレターが調べ学習を支えていたわけであるから、「海と森から学ぶ」の話し合いの授業もその交流学习における意味付けがほしかった点などである。

検証授業後の協議会に助言者や地域の方に参加していただき貴重なご意見をいただけたことは大きな収穫である。これからは教師が子どもたちと地域の素晴らしい人材・自然素材を結びつけるコーディネーター的な役割を果たしていくことも大切と考える。

〈検証事例・その2〉

事例名「地域を題材にし、調査、発表の学習を通して、
自ら学ぶ意欲を高め、表現力を豊かにする指導の工夫」

中学校 第1学年 社会（地理的分野）

1 単元名とねらい

(1) 単元名 「身近な地域」（地理的分野）

(2) 単元のねらい

ア 地域における諸問題から主体的に課題を選択し、取り組む力を伸ばす。

イ 観察、調査のねらい、方法を理解する。

ウ 観察、調査した内容をまとめ、発表する力を伸ばす。

2 単元を通じた授業仮説

ア 自分で課題を見付け、解決していく過程を通して、自ら学ぶ意欲、学ぶ力が身に付くであろう。

イ 自分で出した結論の発表方法を工夫するとともに、互いの発表を聞くことによって、より思考が深まり、豊かな表現力が身に付くであろう。

ウ 互いに発表を評価し合う過程の中で、互いを理解し尊重する態度が培われるであろう。

エ 地域を題材として調査、観察することで、地域に対する関心が高まり、地域社会の一員としての自覚や郷土への誇りをもつであろう。

3 地域の様子

御蔵島は東京から200km離れ、周囲17km、面積20km²、中央には850mの御山をいただき原生林が多く残る自然豊かな島である。しかし、平地が少なく農作物の収穫はわずかで、また船を常置する港がないために漁業も盛んではない。その中で、古くからツゲ材の搬出が産業の根幹をなしており、林業に依存してきた島である。しかし、近年では島の自然がマスメディアに頻繁に紹介され、観光シーズンには観光客が大勢訪れるようになった。

島には、小学校・中学校併設の本校が1校。現在は児童15名、生徒11名が在籍している。地域の学校に対する関心は高く、学校に期待されるところが多い。また、島には高等学校がないため、中学校を卒業するとだれしもが島を出ることになり、生徒の生活面の自立という課題も背負っている。

4 生徒の実態

対象学級の生徒は発言も積極的で授業にも明るく前向きに取り組み、活発な雰囲気がある。しかしながら、自分で課題を見付け考察するといった自主的な面が弱く、また良く考えずに思い付きで発言することが多く、資料を多面的に判断することには、まだ慣れていない面が見られる。

5 単元学習指導計画における仮説と検証の視点

時	指導計画	各段階における仮説	検証の視点
1	地域を題材にテーマを選択し、生徒各自に課題を考えさせる	生徒たちの興味・関心に基づいたテーマを選ぶことで、学習に対し意欲をもって取り組むであろう。	積極的にテーマ選択に参加し、自分の課題を決めることができたか。
2	調査・観察の方法、資料の選択について考え仮説をたてる。	課題を解決するために必要な準備を考えることで、資料活用の力、思考力が身に付くであろう。	課題を解決するために多面的な資料を選択しているか。
3	課題によって、必要な資料を収集したり聞き取り調査、野外観察を行う。	調査や観察によって、自分の課題について多面的な思考が深まるであろう。	課題について、多面的に判断し思考しているか。
4		地域調査によって、地域に対しての関心や理解が高まるであろう。	積極的に地域について調査観察をしているか。
5	互いの情報交換をする。(中間報告)	お互いに調べた方法、内容などを検討し、より良い方法を考えるであろう。	互いの良いところを学び合う姿勢が身に付いたか。
6	(3・4時と同じ)		
7			
8	発表の方法を考える。	発表方法を工夫することにより、表現力が身に付くであろう。	聞き手の立場になって発表方法の工夫をしているか。
9	発表を行う。 各発表に対して、質問・改善点・感想を提出する。 自己評価を行う。	相互評価によって、互いを理解し尊重する態度が育つであろう。	互いに良さを認め、改善点を考えることができたか。
10		また、テーマについての理解が深まり、表現力が豊かになるであろう。	
11	課題について再考しレポートにまとめる。	相互評価を参考に、課題や調査・発表方法を再考し、思考が深まるであろう。	改善点を受けて課題を見直し、より思考を深めることができたか。

6 本時の学習指導

(1) 題材 「御蔵島の環境問題を考えよう」(単元「身近な地域」)

(2) 本時のねらい

ア 発表を通して豊かな表現力を伸ばし、相互に高め合う姿勢を育てる。

イ 他者の意見を聞き尊重する態度をもち、自分の意見を向上させていく姿勢を育てる。

(3) 本時の授業仮説

ア 互いの発表を聞くことで、表現力が豊かになり、郷土についての理解が深まるであろう。

イ 相互評価によって、互いを理解し尊重する態度が培われるであろう。

(4) 展開

	学 習 活 動	教師の支援・指導上の留意点	検証の視点(方法)
導 入	本時の流れを確認する。	発表の方法、発表を聞く上での注意事項を確認させる。	(観察)
展 開	課題ごとに発表する。 ①「ダイオキシン」 ②「海の水質汚染」 ③「海のゴミ問題」 ----- 自己評価、相互評価→ 良い点、改善点を発表する。	司会として、発表者の補助を行い、聞く者の態度にも注意する。 良い点、改善点を聞き出しながら、発表の良い点を板書し、肯定的に評価する。	聞く人に分かりやすい発表であったか。 (観察) (発表レポート) 互いに良さを認め、改善点を考えることができたか。 (感想カード)
ま と め	中間報告との比較をする 次回の予定を確認する。	質問、改善点を受けて、自分の結論を再考することを確認する。	(総合評価表)

(5) 評 価

ア 他者の発表を自分の表現方法の参考にすることができたか。

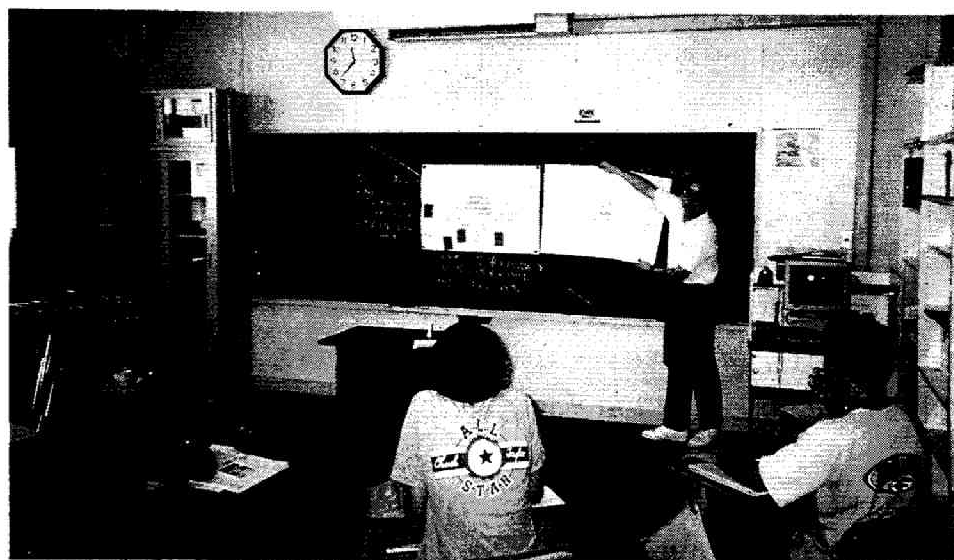
イ 相互評価の中ですべての生徒が各発表を肯定的に評価し、他者を尊重する態度が見られたか。また、他者の評価を参考にして自分の意見を再考することができたか。

7 成果と課題

単元の導入でアンケートを取って郷土に関する興味を調べたが、その興味が生徒にとっては自分で調べてみたいという強い意欲には必ずしも結び付いてはなかった。しかし、中間報告でお互いの内容を知り、方法を学び合い、評価し合った後では、すべての生徒が他者の意見や発表を参考に自分の意見を修正し、取り組みもより意欲的になった。そういう意味で、調べる途中に中間報告を行ったことは有効であった。このことから、導入の段階で自分が調べることがどういう結果につながるかという見通しをもてるような指導を、生徒集団の意識に応じてより工夫する必要があると感じた。さらに、この調査学習の方法を繰り返すことによって、今回の経験が活かされ、学習への興味や意欲が増し、学ぶ力も向上すると考える。

発表では、他者からの評価を授業後にプリントという形で受け取るだけでなく、即時に色カードで4段階に総合評価させて黒板にはるという形式をとることで、自分の発表が他者にどう評価されたのかがすぐ分かるようにした。これらの方法は、自分の良かった点や改善点が明確にされるので、調査方法や発表の内容・方法について再考することに役立った。そして、良い評価を受けた生徒は喜び、自信を深め「また、やりたい」というさらなる意欲につながった。一方、評価が良くなかった生徒も、自己評価では「次は頑張る」と意欲をみせてくれたが、これらの生徒には、意欲が失うことのないように授業中や授業後に個別に自信をもたせる指導が必要になる。また、評価が提示される色カードについては、生徒の心理状況を考え、黒板にはる色カードを良い点と改善点の別の2種類にはり分けるという方法も考えられる。さらに、他者により良く伝える、プレゼンテーションの方法を社会の専門的な分野の人の話や視覚的なもの（接客や販売ビデオなど）を利用して、学ぶことも考えられる。

今回の授業で生徒は郷土のことをより深く理解することができた。さらに少数の生徒ではあるが、自分で何ができるかという郷土を構成する主体的な一員としての意識を高めてくれた。今後はこの意識を保ち続け、さらに実際的な場面で生かせるようにするためには、インターネットなどで他地域に情報を発信し自分の地域との比較を行い、課題についてさらに理解を深めたり、地域と協力して地域の方々への呼び掛けやボランティアとしての清掃活動などの学校外の活動を行うなど指導の工夫が考えられる。



〈検証事例・その3〉

事例名「パソコンやインターネットを使って日本の諸地域について調べることを通して、その地域への興味・関心を高め、自ら学ぶ意欲を高める指導の工夫」

中学校 第1学年 社会科（地理的分野）

1 単元名とねらい

(1) 単元名 「近畿地方」

(2) 単元のねらい

ア 興味・関心に基づき、自ら進んで必要な情報を集め、まとめることができる。

イ 集めた情報をもとに、班ごとに工夫をこらし、よく話し合いながら発表用の作品をつくらることができる。

ウ 班ごとにつくった作品をパソコンを使って、効果的に発表することができる。

2 単元を通した授業の仮説

主体的にいろいろな方法（例、インターネット）を使って、調査・研究をしていく学習活動を通して、自ら進んで学習しようとする態度が養われるであろう。また、班ごとの作品づくりを通して、お互いを理解し尊重し合い、より良いものをつくり効果的に発表しようとする態度が培われるであろう。

3 地域の様子

東京の西端、島部を除けば東京都唯一の村。秋川の源流が二つに分かれて流れ、大自然の恵みの中、明治22年の立村以来百有余年、村の名称・区域も変わらないまま続いてきた。東西18キロ、南北12キロで総面積の93%が山林におおわれていて、学術的にも貴重な自然が残されている。かつては、林業に頼っていたが、最も奥の地区である数馬から奥多摩湖へ抜ける周遊道路の開通や、最近のアウトドアブームもあって、多くの観光客が訪れるようになり、村内でも観光産業を盛り上げていこうという動きが盛んになってきている。中学校は村内では檜原中学校が唯一の中学校で、全校生徒101名の小規模校である。

4 生徒の実態

村内には小学校が1校、その分校が1校ある。生徒のほとんどがその2校から中学に進学してきている。そのため生徒間では極端な上級生と下級生の上下意識がなく家庭的である。生徒は純朴、素朴でおとなしい傾向にあり、与えられた課題にはまじめに取り組むが、自分の考えや気持ちを表現するのが苦手な子どもが多い。

生徒のほとんどは豊かな自然に接しながら育ってきている。住んでいる家の周りのもとより、小学校や中学校のすぐ近くの山や川でも都会では考えられないほどの豊かな自然に恵まれている。ただ、こうした自然の豊かさの中で、かえってこの貴重な財産の価値が見えなくなっている実態もある。村外の者から檜原の自然の素晴らしさを指摘され、あらためて納得する生徒もいる。

5 単元学習計画における仮説と検証の視点

時	指導計画	各段階における仮説	検証の視点
1	今後の学習計画の説明を受けて、目標をもつ。クラスの話合いの中で、学習班をつくる。	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習の内容や目標を理解することによって、今後の学習に対する意欲をもつであろう。 ● より良いグループ活動のための話し合いを通して、お互いを尊重し協力していく姿勢が生まれるであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 今後の学習内容・目標を理解することができたか。 ● より良い班活動のための意識が生まれたか。
2	ビデオをみたり白地図の作業を通して、近畿地方の概略を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ● ビデオをみたり白地図の作業を通して、近畿地方の概略を知り、興味関心が高まるであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 近畿地方の概略を知ることができたか。
3	班ごとに話し合い、どの府・県についての調査・発表を行うか決定する。調べる計画や方法を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ● 生徒たちの興味・関心に基づいた話し合いを通して、調査・発表を行う府・県を選択していくことにより、お互いの意見を尊重し、物事を決定していく態度が身に付くであろう。 ● 計画や方法を考えることで、学習への主体的な意欲が増すであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 生徒一人一人が積極的に課題選択に参加し、話し合いが行われたか。 ● 計画や方法を話し合うことで今後の活動への意欲が生まれたか。
4	インターネットやパソコンソフトの使い方を学習する。 (T・Tの利用)	<ul style="list-style-type: none"> ● 新しい情報の集め方やパソコンを利用したプレゼンテーションの方法を学習することにより、学習への意欲が増すであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 意欲をもって、主体的に学習に取り組めたか。
5 6 7	計画や方法にのっとり、必要な資料を収集したり、調査を行う。 (T・Tの利用)	<ul style="list-style-type: none"> ● お互いに作業を分担した中で、それぞれの生徒が主体的に学習活動に参加することができ、活躍できるであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 個々の作業と班での話し合いを繰り返す中で協力して一つのものをつくり上げようとする意欲が高まったか。

時	指導計画	各段階における仮説	検証の視点
8 9 10 11	収集した資料を基に ・ 協力して効果的なプレゼンテーションのための作品をつくる。 ・ 発表の方法を検討する。	・ 必要な情報を効果的にまとめていく能力が身に付くであろう。 ・ 発表方法を工夫することにより、表現力が身に付くであろう。	・ 積極的に意見を出しながら、協力して作品づくりができたか。 ・ 聞き手の立場になって発表方法を工夫していたか。
12 本時	班ごとに発表を行う。 各発表に対して、評価し、感想を提出する。	・ パソコンを使ったプレゼンテーションを効果的に行うことによって表現力が豊かになるであろう。 ・ 相互に評価し合うことによって、相手を正しく理解し、良さを認め尊重しようという態度が身に付くであろう。	・ お互いに良さを認め、評価し合うことができたか。 ・ 聞き手の立場になって発表の工夫ができたか。
13	班ごとに感想や評価を参考にしながら今回の学習活動についての反省を行う。	・ 他人の評価や感想・アドバイスなどを参考に自己評価することによって、新たな学習活動への意欲が高まるであろう。	・ 新しい課題を発見し次へのステップとし、新たな学習活動への意欲が高まったか。

6 本時の学習指導

(1) 題材 「パソコンを使って近畿地方について発表しよう」

(2) 本時のねらい

- ・ パソコンを使った発表を通して、豊かな表現力を培う。
- ・ 他者の意見を聞き尊重する態度をもち、自らを向上させていく姿勢を養う。
- ・ 班で協力し効果的な発表を行うことを通して、主体的な学習活動への意欲を高める。

(3) 本時の授業仮説

- ・ お互いの発表を聞き、互いに評価し合うことで表現力が豊かになり、他者の意見を尊重する態度が養われるであろう。
- ・ 班で協力し効果的な発表を行うことを通して、主体的な学習活動への意欲が高まるであろう。

(4) 展 開

	学 習 活 動	教師の支援・指導上の留意点	検証の視点（方法）
導 入	本時の流れを確認する。	発表上の注意や聞く上での注意事項を確認させる。 リラックスして発表できるような雰囲気をつくる。	
展 開	班ごとにパソコンを使ってプレゼンテーションを行う。（三重・大阪・滋賀・京都・奈良・和歌山） 各発表ごとに、良い点・アドバイス・評価をカードに記入する。	司会として、各班の発表の補助を行い、聞く者の態度にも注意する。 数名の生徒や出席された先生方からの評価や感想などを聞きながら、各発表についての評価（ほめる）をする。	豊かな表現で、効果的な発表ができたか。（観察） お互いに評価し合うことで、相手を尊重し、また良い評価を受けて今後の学習活動への意欲が高まったか。 （感想カード）
ま と め	今回の学習活動をまとめたビデオを観る。 総合評価を受ける。	全員の活動をプラスに評価する。 最も高い評価を受けた班を表彰する。	お互いの頑張りをプラスに評価できたか。（ビデオ上映）

(5) 評 価

ア パソコンを使った発表を通して、豊かな表現力を培うことができたか。

イ 他者の意見を聞き尊重する態度をもち、自らを向上させていく姿勢を養うことができたか。

ウ 班で協力し効果的な発表を行うことを通して、主体的な学習活動への意欲を高めることができたか。

7 成果と課題

今回の学習活動は子どもたちの興味・関心を起点とし、インターネットなどを利用して調べたことをパソコンを使って効果的に発表し合うというものであった。こうした体験的学習活動は、子どもたちのやる気を大いに刺激し、主体的な学習への意欲を高めることができた。発表後のアンケートにも全員の生徒が『楽しかった。またやりたい。』と回答している。今後の課題としては相互評価の仕方をもう少し工夫し、他の人の見方・考え方に触れ、もう一歩自分の考えを深めることができるような方法を考えていきたい。

〈検証事例・その4〉

事例名「地域素材を生かしたいろはガルトづくりを通して、 郷土愛を育て、表現力を高める指導の工夫」 中学校 第2学年 国語

1 単元名とねらい

(1) 単元名 「いろはガルトの創作」

(2) 単元のねらい

ア 興味・関心に基づき、自ら進んで身近な地域の素材を集め、まとめることができる。

イ 集めた地域素材の中から、自分達とかかわりの深い特色ある題材を選び、班ごとに考え、表現を工夫し、カルタを創作することができる。

ウ 班ごとにつくった作品を発表し合うことができる。

エ 身近な地域を題材とすることにより、地域に対する興味・関心を高めることができる。

2 単元を通じた授業の仮説

自分たちの住んでいる地域を題材として活用することで、地域への興味・関心を高め、自ら課題を見付け、主体的に学習しようとする態度が養われるであろう。また、班ごとの作品づくりやクラス内の発表を通して、お互いの意見を尊重し、自分達の表現をよりよいものに創意工夫しようとする意欲が増すであろう。

3 地域の様子

あきる野市は、平成7年9月に旧秋川市と旧五日市町とが合併してできた市である。なかでも旧五日市町は、都心より西方約50キロ、奥多摩山系の入口に位置し、その約80パーセントが山間部で、秋川溪谷の要所として発展してきた。かつては、多く商人が集まり、五と十のつく五日ごとに「市」を開いていたことから「五日市」という名が生まれた。自然に恵まれ、歴史や伝統のある町として四季を問わず人気があり、訪れる観光客も多い。

本校の学区は広域で、大きく小宮・戸倉・五日市の三地区からなり、特に遠距離の生徒は、路線バスや自転車を利用して通学している。教育に対する保護者の期待と関心は高く、熱心である。古くからの居住者も多く、世代を越え地元をあげて参加、協力を惜しまない。

その他、地域とかかわりの深い代表的なものとしては、例年9月28～30日に行われる地元の古社、阿伎留神社の祭礼の「中学生神輿」の参加がある。生徒有志で祭り実行委員会を組織し、地域の方々のご指導とご協力のもと、3日間大変な盛り上がりを見せる。

また、歴史的に特色あるものとしては、宮城県志波姫中学校との交流会がある。これは自由民権運動が盛んだった明治14年に、地元の青年たちと当時教師として迎えられた旧仙台藩士、千葉卓三郎によって私擬憲法中屈指の「五日市憲法草案」が生まれ、それがもとで草案者卓三郎の出身地、志波姫町と友好姉妹都市関係が結ばれ、年一回生徒会や部活動などを通じ、市内の中学校と親交を深めているものである。

4 生徒の実態

全体的にまじめで明るく、素直である。部活動や生徒会を中心とするボランティア活動、学校行事などにも積極的に参加している。

しかし、授業においては、やや受け身で、じっくり文章を読んで内容をまとめたり、人の

意見を聞いて自分の考えや気持ちを発表したりすることが苦手である。さらに、与えられた課題に対してはまじめに取り組むが、自ら進んで課題をみつけ、解決しようという意欲が不足している。

また、生徒たちは、文化財の宝庫ともいべき伝統のある町に住んでいるが、近年、核家族化が進み、普段それらの歴史や文化に触れ、学ぶ機会が少なくなってきたことなどから、身近な地域の良さ、素晴らしさにあまり気付いていない。これらを踏まえ、恵まれた地域素材を活用し、主体的な学習ができるような指導を工夫していきたい。

5 単元学習指導計画における仮説と検証の視点

時	学 習 計 画	各段階における仮説	検 証 の 視 点
1	<ul style="list-style-type: none"> 「いろはうた」がどういうものなのかを知り、各自、事前に調べておいた地域素材を用いてこれから実際に「いろはカルタ」を創作するという目標をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習目標や学習内容を理解することによって、今後の学習に対する心構えをもつことができるであろう。 事前に自分たちで調べた地域の素材に触れることにより、郷土に対する意識が芽生えるであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習目標を理解することができたか。 必要な地域素材を集め、地域に興味・関心を示し、学ぼうという意欲をもつことができたか。
2	<ul style="list-style-type: none"> あらかじめ調べておいた地域素材を持ち寄り、その中からみんなに共通した特色のあるものを題材として選ぶ。 各クラス6班に分け、各班でどの題材をカルタに用いるか決める。 	<ul style="list-style-type: none"> 特色ある素材を選び出すことにより、郷土に対する興味・関心が高まるであろう。 題材が決まることにより、進んでカルタを創作しようという意欲が湧いてくるであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 題材を設定することにより、課題意識をもつことができたか。 課題に積極的に取り組もうという意欲が高まったか。
3 4 5 6	<ul style="list-style-type: none"> いろはカルタの作り方と留意点について学ぶ。 班ごとにいろはカルタを創作する。 発表の準備（発表カード、大判カルタ作り）をする。大判カルタは読み札と取り札（絵札）を1枚ずつ作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な地域を題材とすることで進んで取り組もうという意欲が高まるであろう。 班の中で話し合いに参加し、意見交換をすることで、お互いの考えを尊重し、表現をよりよいものに工夫したカルタの創作ができるであろう。 カルタ作りや発表の準備をすることにより、お互いに協力し、課題を解決していこうという態度が養われるであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に課題に取り組むことができたか。 お互いの考えを尊重し、自分たちの表現をよりよく工夫することができたか。 お互いに協力し、発表に向けて進んで課題を解決しようとする意欲が高まったか。
7	<ul style="list-style-type: none"> 発表・鑑賞・批評（2班ずつ発表する。） 	<ul style="list-style-type: none"> 創作したものを発表し、お互いに感想を出し合うことにより、 	<ul style="list-style-type: none"> 他の班の発表を聞き自分の意見や感想を

8 (本時) ・ 9		<p>表現力を高め、相手を理解し、尊重しようという態度が身に付くであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 郷土の特色を、短いカルタの中でわかりやすく工夫して表現することにより、郷土に対する愛着が高まるであろう。 	<p>出し合うことによって、表現力を高め、互いを尊重する態度が養われたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 身近な地域を題材として表現することにより、地域に対する興味・関心を高めることができたか。
10	<p>単元のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 各班の作品を提示し、学習内容を振り返る。 完成した作品を冊子にまとめることを予告する。発展学習として、カルタ取り大会などにも挑戦させたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 完成した作品を改めて鑑賞し、カルタ作りの苦労や面白さを実感することにより、自ら課題を見付け、進んで学習しようとする態度が養われるであろう。 いろはカルタが完成することにより、地域を身近に感じ、郷土への愛着が増すであろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 自ら進んで学習し、地域の一員としての自覚や郷土への誇りをもつことができたか。

6 本時の学習指導

(1) 題材 「創作した『いろはカルタ』の発表」

(2) 本時のねらい

ア 班で協力し、相手にわかりやすく伝えられるような発表をする。

イ 各班の発表を聞き、自分の意見や感想をもつ。

ウ いろはカルタに盛り込まれた地域素材から、地域への興味・関心を高める。

(3) 本時の授業仮説

ア 身近な地域を親しみのあるカルタを通して表現し、鑑賞することにより、自ら考え、主体的に取り組む態度、能力が養われるであろう。

イ 作品を発表し、お互いに意見や感想を交換することにより、表現力を高め、相手を理解し、尊重する態度が育つであろう。

ウ 地域素材を用いることにより、地域への興味・関心を高め、郷土に対する愛着も深まるであろう。

(4) 展開

	学 習 活 動	教師の支援・指導上の留意点	検 証 の 視 点
導入 10 分	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習内容を確かめる。 本時の流れを確認し、発表の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習内容を確認する。 本時の学習内容を明確にし、学習意欲をもたせる。 発表の準備をし、聞き取りメモを取り、感動カードの書き込みを行うことを確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自ら進んで学ぼうという意欲をもつことができたか。 <p>(聞き取りメモ・感想カードの用意)</p>

展 開 30 分	<ul style="list-style-type: none"> ● 2班が発表する。 〈発表内容〉 ①創作カルタの発表 ②カルタに用いた地域素材の簡単な解説 ③創作上の苦労や工夫等 ④質疑応答 〈鑑賞・批評〉 ● 発表ごとに、感想カードに記入し、評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 発表者の声の大きさや話す速さ、説明の仕方が適切かどうか確認させる。 ● 発表を聞きながら、意欲的にメモを取り、感想カードを書いているか確認させる。 ● 相手の立場に立った適切なアドバイスができ、自分の発表に生かせるようにさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 班の中で各自役割分担をし、協力して相手にわかりやすく伝えようと工夫しているか。 (発表カード) ● お互いに意見や感想を出し合うことによって、相手を尊重する態度が養われたか。
ま と め 10 分	<ul style="list-style-type: none"> ● 全体のまとめをする。 ● 発表班も感想カードに記入する。他の班より、感想カードを受け取る。 ● 次時への予告をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 本時の学習を確認させる。 ● 本時の学習内容が、次の発表班へ生かされるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 意欲的な発表や聞き取りができたか。 ● 郷土に対する興味・関心を高めることができたか。

(5) 評 価

ア 班で協力し、相手にわかりやすく伝えられるような発表ができたか。

イ 各班の発表を聞き、自分の意見や感想をもつことができたか。

ウ いろはカルタに盛り込まれた地域素材から、地域への興味・関心を高めることができたか。

(6) 授業仮説に対する評価

身近な地域を素材として用いたことにより、主体的に取り組もうという意欲が増し、地域への興味・関心も高まった。また、作品を発表・鑑賞し、お互いの意見や感想を交換することにより、表現力を高め、相手を理解し、尊重する態度が養われた。

7 成果と課題

今回、自分たちの住んでいる身近な地域に着目し、その中からカルタの題材を選んだが、地域を調べる過程で、今まで知らなかった新たな発見や驚きが、たくさんあったようである。この感動をどのような言葉でカルタに表現するかということで、創作上の苦労もあったが、班の中で話し合い、創意工夫を重ね、表現力をより一層高めることができた。さらに、お互いに作品を発表・鑑賞することで、相手を理解し、尊重する態度や、地域に対する興味・関心も高まった。事後アンケートでも、地域のことをたくさん知った、みんなで協力して楽しかったという感想が多く、主体的に取り組むことができた。自分たちの地域を「カルタ」にするというところに、親しみを感じ、意欲も増したようである。

今回の取り組みを通して、子供たちの興味・関心に基づいた主体的な活動を行うためには、地域の豊富な素材を活用することは重要であると感じた。また、自分の考えや思いを表現する場では、積極的な話し合い活動や発表活動をどのように進めていったらよいかという課題が残り、そのためには、今後もこれらを生かした指導法の工夫が必要である。

〈検証事例・その5〉

事例名「地域学習を通して、自分で考え判断し、主体的に 問題解決していく態度・能力を育てる指導の工夫」 中学校 全学年 その他の活動

1 単元とねらい

- (1) 単元名 「地域学習」
- (2) 単元のねらい

地元に古くから伝わる生活に密着している、あるいは密着していたさまざまな事柄を自ら調べ、学び、やってみることで地域を理解していく。また、最近どこの自治体でもごみの問題に頭を悩ませている。自然豊かな本島でも例外ではない。できれば、捨ててしまっている物のなかに、工夫によっては生かせる物がないかといったところにも着目させ、環境問題も同時に考えさせたい。このような活動を通じて生徒のもつ興味・関心を引き出し、主体的に問題を解決していく態度・能力を育む。

2 単元を通じた授業仮説

- ア 式根島でかつて、あるいは現在も行われていたり、作られていたりする事柄について着目するであろう。
- イ その作り方、やり方を聞き、自分でできる部分を検討するであろう。
- ウ 実行に際して必要なもの、あるいは工夫をしなくてはならないものを含め、考え、まとめ、そろえることができるであろう（ごみとなるものでも使えるものがあると考えよう）。
- エ やってみて、経験したことをグループでまとめることによって、自己表現能力も伸びるであろう。

3 地域の様子

式根島は人の住む伊豆諸島の中では一番面積が狭い。しかし、本島はリアス式海岸、白砂青松に恵まれた美しい島である。本校はその式根島のほぼ中心に位置する。昨年度創立50周年を迎え、盛大な記念行事が行われた。島の開島からも110年ほどたつ。島の産業としては漁業、観光、土木工事関係等があげられる。島民の教育に対する熱意や理解度は非常に高く、学校教育に対して常に協力的である。現在では東京からの船が毎日、新島へ行き来する村営船が1日3便、下田からの船は水曜を除く毎日就航し、以前にくらべ交通の便はよくなったが、天候によって欠航する点は前と変わらない。ほとんどの生徒は中学校を卒業すると島を出る。島の人口は年々減少しており、平均年齢も高くなっている。

4 生徒の実態

各学年とも小人数で構成されている。〔全校生徒数17名／1年3名（男子のみ）、2年8名（男女各4名）、3年6名（男子5名、女子1名）〕。生徒たちは保育園からのメンバーがほとんど変わらないこともあり、お互いによく理解している。また、学年間の上下の関係もゆるやかで、全員が友達といった雰囲気である。各学校行事はもちろん、授業でも全学年合同で行うことも日常的にある。生徒は押しなべて明るく、素直で、学習や行事の活動に熱心に取り組む。小人数による長所として、教員の指導が行き届き、何かを活動するときの小回

りもきくという面がある。一方短所として、指示されたもの以上のことはしないとか、できないときはやってもらえるといった甘えの面も現れる。したがって、生徒の自発性、積極性が生かされる教育活動、責任感が生まれる教育活動が望まれる。また、活動を通して生徒の自己表現能力も伸ばしたい。

5 単元学習指導計画における仮説と検証の視点

(1) 1 学年

時	指 導 計 画	各段階における仮説	検 証 の 視 点
1	地元で古くから伝わる事柄について考える。 自分のやれそうなことを選んでみる。	最近では目立たなくなってきたが、生活に密着して、以前は自分の家で行っていたことに気付くだろう。	気付いた事柄をよく発言できたか。
2	自分の選んだ事柄について、詳しい人に話を聞き、まとめてみる。	人を探す、質問する、まとめるといった活動を通して、自発性、積極性、整理する力が高まるであろう。	うまく質問し、まとめられたか。
3	材料や道具を集め、実際にやってみる。	自分のまとめたもの、用意したものでやってみると、時には工夫が必要な点、不十分な点も出るだろう。そういった点を創意工夫し、それを乗り越える面白さに気付かせたい（同時にごみの活用も考える）。	予定していた物に近い物ができたか。実用に耐えるか。安全性にも配慮。
4	自分でやってみたことを説明できるようにまとめる。	教わったこと、自分で苦労したこと、工夫したことをまとめることにより、さらにその事柄に対する理解や興味が深まるだろう。	客観的に見て分かりやすい説明の準備ができたか。

(2) 全学年

時	指 導 計 画	各段階における仮説	検 証 の 視 点
5	1年生の発表を聞き、自分の興味あることを決める。グループごとに打合せをする。	発表することにより表現力が付くだろう。また、関心も高まるだろう。幾つかのテーマをあらかじめ設定し、その中から自分に興味あるテーマに取り組む。これにより、自主性も高まるだろう。	自分が経験したこと工夫したことがうまく伝えられたか。自分たちが中心となって活動している意識が見られたか。
6	聞き取り、準備など実行計画をたてる。	詳しい人から話を聞き、できそうな部分を検討し、まとめる。材料や道具の工夫により、各自の創造性が問われる。	廃棄物の活用も考慮できたか。
7 8 9	グループに分かれて計画を実行する。 (本時)	グループでまとめたもの、準備したものをやってみる。時には工夫が必要となる。また、やってみて不十分な点を補う必要も出る。各自の実行力、創造性、協調性が試される。	予定していたものに近いものができたか。
10	グループごとにまとめる。	準備から完成までの努力や苦労が伝わるようにまとめる。自己表現能力を伸ばしたい。	互いに協力して取り組めたか。達成感を味わえたか。

◎ 今回の「地域学習」で設定したグループは次の通りである。

ア 突きん棒を作って魚を獲るグループ

イ 海藻を採って、海藻サラダ・汁もの・トコロテンなどを作るグループ

ウ さつまいも料理を作ってみるグループ

エ 炭を焼く（作る）グループ

◎ 最終発表は実物やプリント等を用いて、文化祭で行う。

6 本時の学習指導

(1) 題材 「地域学習」

(2) 本時のねらい

- ア 計画・準備したものを実際にやってみる。
- イ グループごとにアイデアを働かせ、協力して取り組ませる。
- ウ 環境問題に関心をもたせる。

(3) 本時の授業仮説

- ア 計画に従い役割に応じて各自が行動することにより、主体的に取り組む態度、能力が要求されるだろう。
- イ 事前にいろいろ考えて準備しても、実際にやってみると足りないことや、分からないことが出てくるものである。自分で工夫して解決する場面では各自の創造力が問われるだろう。また、グループで相談して解決する場面では、さらに自分の意見を相手に伝えたり、相手の考えを理解し協調して決断する力が問われるだろう。
- ウ 実際に取り組むことにより、その物に対する関心や、場合によっては愛着が高まるだろう。また、それを今まで行ってきた人への尊敬の念も生まれるだろう。
- エ 環境問題に関心を持ち、物を大切に扱う気持ちが生まれるであろう。

(4) 展開

	学 習 指 導	教師の支援・指導上の留意点	検証の視点(方法)
導 入	活動の準備	グループごとに用意ができているかの確認	要領よくできているか (観察)
展 開	体験学習 開始 完成品を持ち寄って試食会	グループごとに別れて活動開始 安全確認	作業の進み具合を点検 協力しているか 安全性の確認 (観察・助言)
ま と め	片付け	協力して手際よく	同上

(5) 評価

- ア 野外での活動であり、普段使い慣れていない道具を使用するなど、安全面での危惧があったが、生徒、教師それぞれが気を配り、一つの事故もなく行うことができた。
- イ 教室内では味わうことのできない解放感のもと、各グループが今までの成果を持ち寄り、楽しむことができた。
- ウ 時間的に厳しい班もあったが、時間配分に気を配った結果、すべてのグループが時間内に終えることができた。
- エ 準備から片付けまで、職員を含む生徒全員で取り組み、手際よく行うことができた。

(6) 授業仮説に対する評価

前段の準備の段階から係分担ができており、用意する道具や材料なども協力して準備できた。係分担が細分化されているグループは取り組みが自主的にスムーズにいったが、分担がはっきりしていないところでは、譲り合いのような形での消極的な面も見られた。

実際の取り組みの中で幾つかのハプニングが生じた。突きん棒のグループではいざ出発の段階でゴムの点検をしたところ、外れてしまった。よく見るとゴムの縛り方が反対であった。もう一人は水中で岩を突いてヤジリを折ってしまう。刃を薄く研ぎ過ぎたようであった。海藻グループではサラダを全員分作るのに、トサカノリの分量が難しかったようである。また、ゼリーを多く作り過ぎて食べてもらうのに大変であった。さつまいもグループは野外での火の強さが思うように得られず苦労した。また、思った以上に食材が油を吸い、予定とは若干違った食べ物になった。炭グループは火の起こし方でつまずいたが、その後効率的に火力を維持するための工夫を行い、使う炭を最小限にした。それぞれハプニングがあったにもかかわらず、各自がアイデアを出し無事成し遂げることができた。

今まで何気なく使ったり、食べたりしていた物を、今回の授業で実際に自分で作ったことにより、それらの物に対する理解や関心は各自なりに深まったと見受けられる。

今回「突きん棒」と「炭」のグループは廃材を利用した取り組みであった。ややもするとそのまま見捨てられてしまっているものでも、少しのアイデアと工夫で再び利用価値の高い物に変身することが体験できた。自然豊かで、比較的環境の良い本島でもごみの問題は深刻である。この取り組みを通じて、生徒の環境に対する関心が少しでも増したと考えたい。

7 成果と課題

本校では昨年度より裁量の時間を活用して地域学習に取り組んでいる。この取り組みのために特別活動委員会が組織され、その活動の中心となっている。昨年度は「テングサについて」と「島の漁業や生活」についてグループに分かれて学習した。テングサについては採取して食べるまでを実際に体験してみた。今年は2年目ということもあり、地域の中での学習にちゅうちょは見られなかった。今回の取り組みの中の海藻グループは、上級生が中心となって昨年の学習が生かされていた。

今年は特に生徒の自主的な活動を前面に出し、教師の活動は補助的なものになるように配慮した。その結果、訪問したい家とうまく連絡できず諦めたり、聞きに行くと断られるといったケースも出て、「うまくいかないこともある」という思わぬ経験もできた。

今回の実践を通して、単元のねらいはおおむね達成できたと考えられるが、課題も見えてきた。実践の中で生徒だけではどうしてもよいアイデアが浮かばず、最終的には教師のアドバイスを受けてしまうという場面があった。「自分で考え判断し、主体的に問題解決していく態度・能力を育てる」ねらいがあったが、考えてみると、何も無いところからアイデアを出すということは、大人（教師）にとっても困難なものである。ただ、大人の場合は生徒よりも多くの経験をしており、その分より広い知識の中から工夫や創造をしやすいといえる。そういった点から考えると、教師としては事前に生徒に少しでも多くの事例やヒントを与えることも生徒のアイデアを導くためには大切なのではないかと感じた。こういった場合、指導する側の教師自身の豊富な知識や経験が問われてくるだろう。また、体験学習の場合、地元の人々から学ぶ場面も多い。学習するのは生徒だということではなく、教師側も同時に学習していく姿勢が大切であろう。また、そのような姿勢を教師側がもたないと、よい結果は望めないように思える。「生徒に問うことは、それ以上に教師自らにも問われている」ということを痛感した。

VI 研究の成果と今後の課題

〈仮説①：主体的に課題に取り組み、解決していく学習活動を通して、自ら学ぶ意欲、学ぶ力が身に付くであろう〉について

どの検証授業においても、児童・生徒が自らの興味・関心に基づいた題材を選ぶことからスタートし、自分たちで調べ、まとめた内容を具体物あるいはビデオやコンピュータを駆使した作品として、発表し、相互評価しあうことで学習活動が一区切りつく、という流れで研究を進めてきた。その結果、興味・関心を起点とし、具体物やマルチメディア機器を活用した発表に至る体験的学習活動は、子どもたちのやる気を大いに刺激することが分かった。この際最も大切なことは、学習活動のスタート地点で、子どもたちが本当に没頭できるような題材に出会えるまで、根気よく教師が支援していくことである。知識や技能を効率よく獲得させるという発想ではなく、多少遠回りでも、自分たち自身の課題として意識し、体験できる活動が動き出すまで、教師は一步下がって見守る姿勢が大切であることを感じた。

反面、発表活動から子どもたち同士の相互評価に至る部分で、活発なやり取りができなかった傾向があった。この点については、以下の仮説②の部分で考察する。

〈仮説②：自分の考えや思いをもち、それを表現するという活動を通して、より思考が深まり、お互いを理解し尊重しようとする態度が培われるであろう〉について

今年度の検証授業では、どの子どもも自らの課題意識を強くもち、よく調べ、調べたことを熱心にまとめることができた。さらに、まとめ上げたことを互いに発表しあい、評価しあう体験の中から、他の人の見方・考え方に触れ、もう一步自分の考えを深めることができるのではないかと考えていた。結果的には、自らの課題解決や作品の作成には全力を傾けることができた。しかし、そのエネルギーを、友達の作品についての理解と評価にも向けていくことについては十分であったとはいえず、今後の課題として残ったといえよう。

本報告書の冒頭で、へき地・小規模校の子どもの特徴として「競ったり高め合ったりする体験の不足」を指摘したが、お互いに評価しあうことによって、さらにお互いを高め合うことができるということを、検証授業の中だけでなく、年間を通した学習活動や学級づくりの中で繰り返し体験させていくことの大切さを改めて感じた。同時に、へき地・小規模校の子どもたちは「自分の考えや気持ちを表現することが不得手」と言われる傾向もあるが、それぞれの検証授業において、具体物やビデオレター、ホームページ、コンピューターネットワーク等、発表形態に様々な工夫を凝らすことによって、表現活動に対する子どもたちの苦手意識を克服できる可能性を見いだすことができた。直接経験と間接経験双方のよさを生かす工夫によって、表現活動が本来もっている楽しさを子どもたちが体験するきっかけとなったと考える。

〈仮説③：地域を知ることで、関心が高まり、地域社会の一員としての自覚や郷土への誇りをもつであろう〉について

自分たちの生まれ育った地域の素材を、丹念に調べ、まとめる作業の中で、身近にありながら気付かなかった地域の特色について、子どもたちは改めて気付くことができた。それらを具体物やビデオ画像、パソコンに入力した文字情報やイラスト等を通じて、より多くの人に知ってもらいたいという願いが、地域社会の一員としての自覚や郷土への誇りをもつことにつながっていったことは、これまでの諸研究と通じるところであった。